

エイレナイオスの人間理解

——神の *Imago* と *Similitudo* を中心として——

菊 地 栄 三

はじめに

三世紀初頭、ルグドゥヌム(Lugdunum、今日のリヨン)の司教として殉教したといわれるエイレナイオス(Eirenaios)⁽¹⁾は、当時の教父たちの中にあつて、人間の問題にもっとも深い理解を示した一人といえる。本稿は、彼のそうした人間論の一部として、人間の本源に関する教説の中から、とくに神の *imago* と *similitudo* の問題を考察しようとするものである。なお、ここに「人間の本源に関する教説」といったのは、ブルンナーがキリスト教人間学の三つの要素として挙げた「人間の本源に関する教説と、その反逆に関する教説と、本源と反逆との矛盾の中に生きる人間の現実に関する教説」の中の、いわば第一の問題を中心にするとの意味である。⁽²⁾

次に、神の *imago* と *similitudo* という言葉の典拠についてであるが、それはいうまでもなく、旧約聖書の創世記一・二六—二七である。とくに、この冒頭の章句、「われわれのかたまた (besalmenn) われわれにかたどつて (Kidenuthennu)】(krr' eikōna gēmetōon kōn kōd' ōmoioōon — LXX; ad imaginem et similitudinem nostram — Vulgata;

in our image, after our likeness—AV, RV, RSV) の部分だ、本稿で考察しようとする二つの言葉が見出される。すなわち *imago* (*selem, eikōn, image*) と *similitudo* (*denūth, ōmōlōws, likeness*, 「似姿」) とがそれである。「なお本稿では、以下 *imago, similitudo* に代えて夫々「像」「似姿」の言葉を用いることにする。」

ところで、これら二つの言葉は、果して夫々の独自の意味を有するのであるか。すなわち、神の「像」と「似姿」とは夫々異なったものであろうか。それとも、「似姿」はほとんど、あるいは全く、「像」に包含される言葉にすぎないのであろうか。この問題はこれまで、時には聖書学的立場から、時には教義学的立場から種々考察されてきたところであるが、本稿はこの問題に対して、少なからず後世に影響を与えたエイレナイオ自身の所説の中に、若干その考察を試みるものである。

一

エイレナイオスが神の「像」ならびに「似姿」に言及している箇所の中から、まずもっとも重要と思われる一部(『異端反駁』第五卷六章一節の全文)をそのまま引用して見たい。^(a)

「ところで、神は彼の被造物のうちにあつて、それを彼の僕(*puer*)にふさわしくかたどることによつて、讚美されるであらう。なぜなら、父の御手によつて、すなわち子と聖靈とによつて、人間は——しかも人間の一部分ではない——神の似姿にしたがつてつくられているからである。ところで、心と霊とは人間の一部ではありえても、決して人間(そのもの)ではありえない。そして、完全な人間は、父の霊を受けた心との混合・結合であり、また神の像にし

がつてつくられた肉との混合である。それゆえ、使徒はいう、「円熟している者 (perfectus) の間では知恵を語る」と。つまり、彼は彼自らが話したように、神の霊を受けて、神の霊を通してすべての言葉で語ったそれらの人々を、完全な者(円熟している者)と呼んだ。そのようにまた、われわれは、預言の賜物を有し、聖霊によってあらゆる種類の言葉を語り、人々の秘事を一般のために公けにし、神の秘義を明らかにする多くの兄弟たちが教会にいるのを聞いている。そして使徒は、これらの人々をも霊的な人と呼んでいるが、それは彼らが聖霊にあずかるがゆえに霊的であるのであり、彼らから彼らの肉が奪いとられたからではなく、ただただ霊的となったからである。なぜなら、もし誰かが、肉の、つまり被造物の実体を取り去って、ただ霊的なもののみを考えるならば、そのとき、かようなものは霊的な人間ではなく、人間の霊もしくは神の霊である。しかし、霊がここに心と混合し、被造物と結合されたとき、聖霊のほとばしりによって人間は霊的な完全な者につくられる。そしてこれこそ神の像と似姿にしたがつてつくられた人間である。しかし、もし心に聖霊が欠けることになれば、かような者は実際生命的なものであり、肉的なものにとどまるので、その者は不完全な者であろう。そしてその者は、確かに被造物のうち(神の)像を持ちながらも、聖霊による似姿を受けていないであろう。そしてかように、この者は不完全な者である。このようにまた、もし誰かが(神の)像を取り去り被造物を侮るならば、もはや人間を理解することが出来ずに、私がすでに語ったように人間の一部分としてか、もしくは人間以外の他の何ものかとして理解出来るだけである。なぜなら、肉の創造(物)はそれ自体では完全な人間ではなく、人間の身体であり人間の一部分である。また、心もそれ自体では人間ではなく、人間の心であり人間の一部分である。また、霊(自体)も人間ではない。なぜなら、それは霊であって人間とは呼ばれないからである。ところで、これらすべての混合と結合とが完全な人間を形成するのである。このゆえに、使徒は自らを説

明しながら、完全な靈的な救われた人間を明らかにしている。彼は『テサロニケ人への第一の手紙』において次のように語っている、「どうか、平和の神ご自身が、あなたがたを全く(Perfectos)きよめて下さるように。また、あなたがたの靈と心とからだ(Corpus)とを完全に守って、わたしたちの主イエス・キリストの来臨のとき、責められるところのない者にして下さるように」(五・二三)。これら三つのもの、すなわち心と身体と靈とが、主の来臨のときに損うことなく完全に持続することを祈るにあたって、もし彼が、三つのものの回復と結合とがまた同じそれら自身の救いであることを知らなかったならば、全く彼はどんな理由を持ったといふのであろう。であるから、責められるところのない三つのものを主に示すそれらの者を、彼は完全な者といっているのである。こうして自らのうちに神の聖靈を堅持し、責められるところのない心と身体とを保持する者は完全な者であり、そして彼らは、神の、すなわち神へ向けられた信仰を保持し、また隣人に対しての正義を維持するのである。」

以上の言説の中に、彼の神の「像」と「似姿」とに二分する考え方や、この両者と人間の靈・心・肉との関係についての見解などが示される。

さて、彼によれば人間は、「父の御手によって、すなわち子と聖靈とによって(per manus Patris, id est, per Filium et Spiritum)」つくられ、しかもそれは「神の似姿としたがって(secundum similitudinem Dei)」つくられたものであった。しかも、神の「似姿」につくられたのは、人間のある部分に限られたのではなく、人間そのものがそのようなにつくられたことを語っている。心とか靈と呼ばれるものが人間の中にあるとしても、またそれらが人間の重要な部分を占めるとしても、彼にとって、靈のみでは、また心のみでは人間ではありえなかった。つまり、「心と靈とは人間の一部ではありえても、決して人間(そのもの)ではありえない(anima et spiritus pars hominis esse

possunt, homo autem nequam.)」のである。このように、彼の意味する人間は心であると同時に霊であり、同時にまた肉でもあるような一個の統合的存在であった。「なぜなら、肉の創造(物)はそれ自体では完全な人間ではなく、人間の身体であり、人間の一部分である。また、心もそれ自体では人間ではなく、人間の心であり人間の一部分である。また、霊(自体)も人間ではない。なぜなら、それは霊であって人間とは呼ばれないからである。ところで、これらすべての混合と結合とが完全な人間を形成するのである(Neque enim plasmatio carnis ipsa secundum se homo perfectus est; sed corpus hominis, et pars haminis. Neque enim et anima ipsa secundum se homo; sed anima hominis, et pars hominis. Neque spiritus homo: spiritus enim, et non homo vocatur. Commixtio autem et unio horum omnium perfectum hominem efficit.)」。思うに、人間の肉を軽視ないしは否定する考え方は、当時の大きな傾向の一つであり、彼の正面の敵であったグノーシス主義においてとくにそうであったといえよう。彼が、著作の中でしばしば肉を強調し、肉なき人間は人間ではなく、霊的な人間にも肉の不可欠なることを語っているのは、そうした状況によるものであろう。「もし誰かが、肉の、つまり被造物の実体を取り去って、ただ霊的なもののみを考へるならば、そのとき、かようなものは霊的な人間ではなく、人間の霊もしくは神の霊である(Si enim substantiam tollat aliquis carnis, id est plasmatis, et nude ipsum solum spiritum intelligat, jam non spiritalis homo est quod est tale, sed spiritus hominis, aut Spiritus Dei.)」。このように、神の「似姿」につくられた人間とは、彼にとって霊と心と肉(身体)とからなる人間であり、また完全な人間、霊的な人間をも意味したものとと思われる。

では、彼にとって神の「像」は何を意味したのであろうか。彼は次のように語る、「完全な人間は、父の霊を受け

た心との混合・結合であり、また神の像にしたがってつくられた肉との混合である (perfectus homo commixtio et admixtio est animae assummentis spiritum Patris, et admixta ei carni, quae est plasmata secundum imaginem Dei.)。このいちぢか晦渋な文章は、おそろしく「完全な人間とは父の霊を受けた心と、神の像につくられた肉との緊密な結合である」との意であろう。⁽⁶⁾ いずれにせよ、ここにおいては、神の「像」は主に人間の肉に関連して語られており、神の「像」としての人間がそのまま完全な人間、もしくは霊的な人間と理解することは困難である。さらに彼は次のように語る、「霊がここに心と混合し、被造物と結合されたとき、聖霊のほとばしりによって人間は霊的な完全者につくられる。そしてこれこそ神の像と似姿にしたがってつくられた人間である。しかし、もし心に聖霊が欠けることになれば、かような者は実際生命的なものであり、肉的なものにとどまるので、その者は不完全な者であろう。そしてその者は、確かに被造物のうち(神の)像を持ちながらも、聖霊による似姿を受けていないであろう (Cum autem) spiritus hic commixtus animae unitur plasmati, propter effusionem Spiritus spiritualis et perfectus homo factus est: et hic est qui secundum imaginem et similitudinem factus est Dei. Si autem defuerit animae Spiritus, animalis est vera, qui est talis, et carnalis derelictus imperfectus erit: imaginem quidem habens in plasmate, similitudinem vero non assumens per Spiritum :」。⁽⁷⁾ ここにわれわれは、彼のいう完全な人間と不完全な人間との明らかな対比を見ないだろうか。彼はここで、完全な人間とは神の霊を受けている、霊と心と肉とからなる人間のことであり、神の「像」と「似姿」とにしたがってつくられた人間とはまさにこのような人間であることを語っている。また不完全な人間とは、神の霊を欠如した人間、したがって心と肉のみの人間であり、こうした人間は神の「像」を持ちながらも、もはや神の「似姿」を失った人間であることを示しているように思われる。

さびにまた、彼は他の箇所でも次のようにも語っている、「昔、人間は神の像にしたがってつくられたといわれたが、それは明らかに示されなかった。なぜなら、言葉はまだ見えざるものであり、その(言葉の)像にしたがって人間はつくられたからである。またこのために、彼(人間)は容易に似姿を失ってしまった。しかし、神の言葉が肉をとったとき、そのお方は(これら)二つとも確固なものにした。なぜなら、そのお方は、自らその像であったものになつたことによつて真の像を示し、またそのお方は、見ることの出来る言葉を通して、人間を見えざる父に似させることになつて、似姿を確かなものとして立つ直したからである(In praeteritis enim) temporibus, dicebatur quidem secundum imaginem Dei factum esse hominem, non autem ostendebatur. Adhuc enim invisibile erat Verbum, cuius secundum imaginem Dei factum est, utraque confirmavit: et imaginem enim ostendit veram, ipse hoc fens, quod erat imago eius; et similitudinem firmans restituit, consimilem faciens hominem invisibili Patri per visibile Verbum.)」⁽⁸⁷⁾ また彼は、神がわれわれに救いを与えたのは、「われわれがアダムにおいて失つたところのもの、すなわち、神の像と似姿としたがって存在することを、われわれはキリスト・イエスにおいて取り戻さんがため」(ut quod perdidderamus in Adam, id est, secundum imaginem et similitudinem esse Dei, hoc in Christo Jesu recipemus.)⁽⁸⁸⁾と申したと語っている。

したがって、これらの言説を要約するならば、最初の人間としてのアダムは神の「像」と「似姿」とにしたがってつくられたが、やがてその「似姿」を失い、そして再びイエス・キリストによつてその「似姿」を回復したということが出来よう。換言すれば、人間はアダムにおいて神の「像」と「似姿」とを有する完全な霊的な人間としてつくら

れたが、やがて自ら犯した罪によって「似姿」なき「像」のみの不完全な人間となり、イエス・キリストによって再び「似姿」を有する完全な人間を取り戻すことが出来たということである。そしてまた、神の「像」が主として心とか肉といった人間の本体、もしくは人間の自然的所与を指示しているのに対して、神の「似姿」は人間の靈的要素、つまり、それによって神との正常な関係が可能となるところの神からの超自然的賜物を指向する言葉であったと考えられる。

二

さて、エイレナイオスが神の「像」ならぬ神の「似姿」をもって語ろうとしたものは、これまでに見た限り、やがてカトリック神学においてその展開を見る、いわゆるアダムの「原義〔原始義〕(Justitia Originalis)——つまり、アダムは罪を犯す以前にあっては死も苦しみもまぬがれ、神からの超自然的無償の賜物を受けていたという考え——の先駆的な理念であったと考えられる。ところで、彼の著作は必ずしもこのような理念で一貫していたとはいえない。次にそうした例を若干挙げて見たい。

彼の『異端反駁』第四卷三七章は、「人間は自由であること、また選択する能力が与えられていること、したがって、ある人は生まれながら善であり、ある人は悪であるということはない⁽¹⁰⁾」という見出しを付した一章であるが、この中で彼は次のように語っている、「しかし、人間は始めから自由な意志を持っており、また神は自由な意志を持っており、その神の似姿に人間はつくられているのであるから、善いことを確保するよう、つねに忠告が彼(人間)に

与えられ、そしてこのことは神への従順な意志から全うされるのである (Sed quoniam liberae sententiae ab initio est homo, et liberae sententiae est Deus cuius ad similitudinem factus est, semper consilium datur ei continere bonum, quod perficitur ex ea quae est ad Deum obedientia.)⁽¹⁷⁾ また、他の箇所でも次のように語られている。「しかし、麦やもみからは確かに生命力のない理性のない存在であり、本性上そのようにつくられたのである。だが、理性的な人間はこれによって神に似ており、また意志をめぐって自由をつくられるのである (Sed frumentum quidem et paleae, inanimalia et irrationabilia existentia, naturaliter talia facta sunt: homo vero rationalis, et secundum hoc similis Deo, liber in arbitrio factus)。⁽¹⁸⁾ 以上の箇所では、神の「似姿」は、主として人間の自由意志や理性を意味しているものと解される。つまり、ここに見る限り、人間は神同様に自由意志の持ち主であり、理性的存在であり、このことがまさに神の「似姿」の意味であるかのように語られている。しかし、このような言説は、これまでに見てきた彼の用法からするならば、矛盾したものではないにしても、ある種の曖昧さ、不明瞭さを禁じえない。なぜなら、人間の自由意志や理性は人間の本性に属するものとして、むしろ彼のいう神の「像」の實質にふさわしいものと見なされるからである。

さらにわれわれは、彼の思想の一貫性が疑われるような一つの重要な問題に出会う。すなわち、すでに述べたアダムの完全性を全く否定するような彼の言説に出会う。『異端反駁』第四卷三八章の見出しが、「なぜ人間は始めから完全につくられなかったか」⁽¹⁹⁾であるように、彼はこの章の一節において、なぜ神が人間を完全なものとしてつくらなかったかの理由を述べながら、つづけて次のように語っている、「すなわち、母親は確かに幼児に全き(強い)食物

を与えることが出来るが、彼（幼児）はまだあまり固い食物を自分で摂取することが出来ないように、神自らは確かに人間に始めから全きものを与えることが出来たが、人間はそのものを受けることが出来なかった。というのも彼（人間）は幼児だったからである（*Quemadmodum enim mater potest quidem praestare perfectam escam infanti, ille autem adhuc non potest robustiorem se percipere escam: sic et Deus ipse quidem potens fuit homini praestare perfectionem ab initio, homo autem impotens percipere illam: infans enim fuit.*)⁽¹⁴⁾。ここに語られてゐることは、主としてアダムの幼児性・未熟さ・不完全さについてであらう。しかもここでは、人間が神に似た存在であるよりも、被造物である人間と神との隔たりの強調すら感じられる。また、人間は全き訓練を経て完全な者へと向うべきことが示唆されている。さらに同章の二節では、神の「像」と「似姿」とがアダムにおいてよりもキリストにおいて、換言すれば創造の秩序においてではなく救済の秩序において与えられたと見なしうる箇所さえ存在する⁽¹⁵⁾。そしてまた、アダムの幼児性への言及はないが、人間の成長・進歩の可能性と必要性とが説かれている。すなわち、つくられざるものこそ完全なもの、つまり神であり、人間は日々進歩しながら完全なものへと向う存在であることを説きながら、つけて次のように語っている、「人間はまずつくられるべきであり、つくられた者は成長すべきであり、成長した者は強化されるべきであり、強化された者は豊かになるべきであり、豊かになった者は救われるべきであり、救われた者は真に栄光を与えられるべきであり、栄光を与えられた者は彼の主を見るべきである。なぜなら、神はまさに見られるべきお方であるからである。そして、神を見ることは朽ちないものについて効果的であり、朽ちないものは実に神にもっとも近づくべきである」(Opotuerat autem hominem primo fieri, et factum augeri, et auctum corroborari, et corroboratum multiplicari, et multiplicatum convallescere, convalescentem vero glorificari, et

glorificatum videre suum Dominum. Deus enim est qui habet videri : visio autem Dei efficax est incorruptelae :
in corruptela vero proximum facit esse Deo.)」⁽⁹⁷⁾

彼の言説には、このように完全なアダムではなしに、不完全なアダムをも見ることが出来る。このことは、一見矛盾した二つの見解が共存するかのように見える。しかし、この二つの見解は全く相容れないものであるか。一体、完全・不完全とは何を意味しての完全・不完全であろうか。思うに、最初の人間としてのアダムが完全な人間といわれるのも、それは人格的・道德的完成者であるよりは、神との正常な関係にある者、あるいは信仰に成熟した者の意味であろう。アダムが神の「像」と「似姿」とにつくられた人間であり、また靈的な人間として語られるのもその意味においてであったと思われる。最初の人間アダムが不完全な者であるというのも、神との関係を喪失した、いわゆる罪人を指すのではないことは明らかであり、ただ神との関係を保ちながらも、その信仰において未熟なる者、単純・素朴なる者の意味であった。したがって、ここに完全・不完全といわれる意味は、信仰と不信仰との対立ではなく、精々信仰の枠内における成熟と未熟との相違であったということが出来る。もしこのような理解が可能なら、彼の二つの見解も——確かに一人の人間の神学思想としては一貫性と統一性を欠いたものといわねばならないが——全く矛盾したものとはいえない難いであろう。

それにしても、この二つの見解の間には、なおも埋めつくせない間隙のあることも認めなければならぬ。そして、完全なアダムと不完全なアダムのいずれが、人間の本源に関する彼の理解にふさわしいものであるかということも重要な課題となるに違いない。しかし、この問題に答えるためには、彼のアダム論についてのより多くの考察が必要と思われる。

最後に、彼の「像」と「似姿」との用語や用法などに関して若干の検討を加えて終りとしたい。彼のこれらの用語が、旧約の創世記に基づくことはすでに述べた⁽¹⁷⁾。しかし、その用法が果して聖書の基礎の上に立つものであるか否かを論ずるためには、これらの用語の聖書学的考察を必要とするであろう。今少しくその点を検討するならば、まず彼において特徴的なこの二分した用法というものは、それ自体決して非聖書的な、唐突な思い付きではなかったといえる。なぜなら、旧約聖書においても、*salem*（「像」）と *denudh*（「似姿」）の二つの言葉は全くの同義語ではなく、夫々異なる意味をもって使われた用例がうかがわれるからである⁽¹⁸⁾。しかしながら、これらの言葉が夫々、神の「像」と神の「似姿」として用いられるとき、それらは相對して二つの異なった意味を強調するよりも、相和してほとんど同義の言葉となっている。したがって、旧約の世界における神の「像」とは、ほとんどその内に神の「似姿」を包摂する用語であり、しかもそれは、おおよそ次のような意味で用いられたということが出来よう。すなわち、「(一)神の像は身体的・精神的な、神と人との相似相応の關係を表わす、(二)それは墮罪の後にも洪水の後にも失われなかった」ということである⁽¹⁹⁾。もしそうであれば、エイレナイオスの言説が全く旧約聖書に基づいたものであるともいい難いであろう。むしろこの点では、彼は新約、とくにパウロの影響の下にあったというべきかも知れない。パウロの場合も、エイレナイオスに見られるような神の「像」と「似姿」とに二分する用法はなく、したがって旧約同様、「似姿」は神の「像」の下に一体化されていると解されるが、おそらく当時の誰よりも神の「像」と墮罪との深い關係を語った

パウロの思想は、そのままエイレナイオスの継承したところであった。すなわち、神の「像」が最初のアダムにおいて失われ、第二のアダムたるキリストにおいて回復されるとしたパウロの信仰は、基調においてはエイレナイオスのそれであったといつてよい。

では、神の「像」と「似姿」とに二分する彼の用法は、全く前例のないものであろうか。われわれは彼の著作自身の中に、しかも彼が反駁したヴァレンティノス派の教説の中にそれを見出すことが出来る。彼らの教説についてエイレナイオスは次のように述べている。「彼(デミウルゴス)はかように世界をつくつてから、また、ちりの人間をこの乾いた土からではなく、眼に見えないものから、溶けやすい流動的な材料からとりながらつくつた。そして彼が人間に心的なものを吹き込んだことを彼ら(ヴァレンティノス派)は明らかにしている。そして(彼の)像と似姿としたがつつてつくられた者はこのものである。そして確かに物質的なものは像にしたがつて存在し、なるほど神に近いが、神と同じ本質ではない。他方、心的なものは似姿にしたがつており、そこからその本質は生命の靈と呼ばれた。なぜなら、それは靈の流出によるものだからである。そして最後に、人間は皮の着物を着せられたと彼らはいっている。そしてこれ(皮の着物)が彼らの意味するところでは感覺的函(体)である(Cum fabricasset igitur mundum, fecit et hominem choicum, non autem ab hac arida terra, sed ab invisibili substantia, et ab effusili et fluida materia accipientem: et in hunc insufflasse psychicum definunt. Et hunc esse secundum imaginem et similitudinem factum: secundum imaginem quidem hylicum esse, proximam quidem, sed non ejusdem substantiae esse Deo: secundum similitudinem vero psychicum, unde et spiritum vitae substantiam ejus dictam, cum sit ex spiritali defuitione. Post deinde circumdatam dicunt ei dermatinam tunicam: hanc autem sensibilem carnem

(20) esse volunt.」以上の彼らの教説は、おそらく創世記一章二六節、二章六一七節、三章二一節などに基づく、彼ら独自のグノーシス主義的解釈によるものであった。エイレナイオスの用法も、あるいは直接的にはこうしたグノーシス主義者に対抗、反駁するために、しかもより深く聖書に準拠して解釈しようとしたところに生まれたものと推察出来ないであらうか。

またわれわれは、エイレナイオスよりも約半世紀後の偉大な教父オリゲネスの中にも、彼独自の神の「像」と「似姿」とに二分する用法を見るのは興味深い。『諸原理について』第三卷六章一節の中で彼は次のように述べている。

「神は言われた、『我々の像、我々の似姿に従って人を造らう』と言っているのである。それだけでなく、「神は人を造られた。即ち、神の像に従って造り、男と女とを造られ、彼らを祝福された」と言い添えている。したがって、「後者の箇所で」「人を神の像に従って造られた」と言って、似姿については黙しているのは、人間が最初に創造されたときに、像としての身分 (imaginis dignitas) を与えられたが、似姿という完全さは「世の」完成の時まで留保されていることを示しているのにはかならない。つまり、人間は「神の似姿を」自己の精励なる熱意をもって、神を模倣することで獲得すべきである。即ち、像としての身分を与えられたことで、始めから完全になることの可能性が人間に与えられているが、人間は終りの時になって初めて、わざを遂行することによって、完全な似姿を自ら仕上げ(21)るべきである。

この引用箇所に見る限り、彼は神の「似姿」を終末時において、しかも人間が自ら仕上げるべきものとして語っている。したがってここには、エイレナイオスとはかなり異なった見解が示されていることは確かだが、エイレナイオスの中にもこれと類似した考えが皆無であるともいい難い(22)。なお、神の「像」と「似姿」とに二分した用法自体は

——オリゲネスの場合も一つの例証として挙げたにすぎないが——そこに理解の相違こそあれ、エイレナイオス以後、中世に向ってますます一般化していったことがうかがわれる。

次に、エイレナイオスのこの問題に対するブルンナーの見解を取り挙げてみたい。ブルンナーはその著『矛盾の中にある人間』の中で、エイレナイオスを評して次のように述べている。

エイレナイオスは、ほとんど一五〇〇年にわたって教会のとるべき道を示し、しかも彼の解決は今日もなおカトリック教会の解決である。また「初期カトリック教会の最初の偉大な神学者(Der erste grosse Theologe der altkatholischen Kirche)」たる彼は、「像」と「似姿」という二つの表現に基づいて、人間の中に二つの要素を区別した。二つの要素とは、人間の本性たる自由と理性とをその実質とする神の「像」と、神の決定にしたがう人間の自己決定、つまり超自然的な神との交わりという格別な神の賜物としての「原義」をその実質とする神の「似姿」とがそれである。そしてまた彼は、人間の本性に加えられたこの「似姿」は罪によって取り払われたが、人間の本性、つまりフーマーヌム(humanum)たる神の「像」は人間に残存したと述べている。こうした彼の解決は、人間学の中心問題に対する単純でしかも巧みな解決である。そして、カトリックの、神学と文化理解との二階建構造の全体はこの解決の上に立っており、これは測り知れない結果をもつ総合である。⁽²³⁾

以上のように、ブルンナーはエイレナイオスのこの問題に対して実に鮮やかな見解を提供する。確かに、これまでの考察からもうかがわれるように、エイレナイオスは神の「像」と「似姿」との相違を語っており、基本的にはブルンナーのいうような、いわゆる自然的賜物と超自然的賜物との二つの異なった要素を考えていたということが出来る。しかし、エイレナイオスの言説の中には、そのような考えとは必ずしも馴染まない見解も同時に見出すことが出来る。

来た。このことは、彼が、神の「像」と「似姿」とについて、ブルンナーが彼についていうほどの明快な一貫した理解にはいまだ達していなかったためではないかと思われる。したがって、ブルンナーがエイレナイオスの解決したものととして語ったことは、むしろ彼以後のカトリック教会の解決によりよく妥当するものであり、彼自身は、その教会の解決に先鞭をつけた第一人者であったというべきではなからうか。⁽²⁴⁾

註

(1) 彼の年代・生涯・著作については、簡単ながら、拙稿「エイレナイオスと聖書—正典成立の過程をめぐって—」『基督教学研究』第3号、京都大学基督教学會、一九八〇、三四—三六頁参照。

(2) E. Brunner, *Der Mensch im Widerspruch*, Zürich, 1965, S. 86.

(3) Irenaeus (ἱρηναιος), *adversus haereses* (ἁπὸ ἀντι-ἁρηναιου), V. 6. 1 (ii), 333-335), *テッセムケハニ* ヲ W.W. Harvey (ed.), *Sancti Irenaei, Libros quinque adversus Haereses*, Cambridge, 1857, 2 vols. を用いたが、巻・章・節の区々は、ケリーニオス・テッセムケ (J. P. Migne, *Patrologiae Graeca*, Tomus VIII (1), (2)) に準ずるものとす。ただし、括弧内の数字は前述の Harvey のテッセムケの巻数(前者)と頁(後者)を示したものとす。なお、エイレナイ

オスの『異端反駁』の原文はラテン語で、一部がギリシア語でも残存しており、本稿での私訳は主にラテン語に基づいてゐる。

(4) 「クリント人の第一の手紙」二・六。

(5) 肉 (caro) と身体 (corpus) とは彼に比べてほとんど同義語として使われている。このことには、彼がこの箇所 (V. 6. 1) で「テサロニケ人への第一の手紙」五・二三を引用して「この心から肉がわかれぬ」。

(6) *Der vollkommene Mensch ist die innige Vereinigung der Seele, die den Geist des Vaters aufnimmt, mit dem Fleische, das nach dem Ebenbilde Gottes geschaffen ist—*Irenaeus II (Bibliothek der Kirchenväter? 3—4, Kempten & München, 1912, übers. v. E. Kiebha), S. 163. なお、この箇所だけから、彼の心と肉との二元論的思考を指摘することは早計であらう。註(7)参照。

(7) 聖書には心と肉との二元論的思考は欠如していると考えられるが、エイレナイオスも——多少ヘレニズムの影嚮なしとしないが——基本的には聖書の思考を継承していると思われる。この箇所もそうした彼の思考の下に語られているものと解したい。

なお、彼の言葉の上からは、神の霊と人間の霊との関係や人間の霊と心との関係は必ずしも明らかでないように思われる。彼は「父の霊を受けた心」とか「心に聖霊が欠ける」といった表現を用いているが、その心とは肉と区別された心の部分というよりも、肉さらには人間と同義語と考えられないだろうか。そしてその心底には、人間の霊は神から与えられ、その霊によって神との出会いが可能となるという考えがあるように思われる。

(8) Iren, op. cit., V. 16. 2 (ii. 368).

(9) Ibid., III, 18. 1 (ii. 95).

(9) Homines liberos esse, et eligendi facultate praeditos; nec proinde quosdam natura bonos, quosdam natura malos esse. なお、この見出しは「シーニオのテクストからのもの」である。

(11) Iren, op. cit., IV. 37. 4 (ii. 289).

(12) Ibid., IV. 4. 3 (ii. 154).

エイレナイオスの人間理解

(13) Cur non ab initio perfectus factus est homo. なお、この見出しは「シーニオのテクストからのもの」である。

(14) Iren, op. cit., IV. 38. 1 (ii. 292-3). なお、「ここに幼児 (infans) と訳したギリシヤ語は *παιδίον* ではなく *νηπιος* である。

(15) 彼のもう一つの著作『使徒的説教の証明』九七章にも同様の考えが見られる。

(16) Iren, op. cit., IV. 38. 3 (ii. 296).

(17) 本稿九七—九八頁参照。

(18) *seleis* は元来は石像(民数記三三・五二)、柱像(列王紀下一一・一八)、立像(エゼキエル書七・二〇、一六・一七)などを意味し、創世記一章では動物と区別して「直立の姿」を意味するとも考えられる。それに対して *demach* は型(列王紀下一六・一〇)‘形(エゼキエル書一・一〇、一〇・二二)と訳された語と同一で、相似を示すけれども同一ではなく、むしろ同一性を弱めるための用語とみられる。中沢治樹『*Imago Dei* の聖書学的考察』『テコロギヤ・エキチメニカ』、立教大学・菅岡吉先生三十五年記念論文集編纂室、一九五八の二—二二頁参照。

(19) 中沢治樹、同書、三三頁参照。

(20) Iren, op. cit., I. 5. 5 (i. 49-50). なお、「同じ」同じ本質

(*eadem substantia*)」と訳したギリシア語が *quodvultus* であることは注目に値しよう。

(21) オリゲネス『諸原理について』(小高毅訳)、創文社、一九七八、二六七―八頁からそのまま引用した。

(22) 『異端反駁』の最終の章節である第五卷三十六章三節を参照。ここでは、人間が神の「像」と「似姿」とにづくられるのは終末時においてであるとも解される。

(23) E. Bruner, *op. cit.*, S. 96.

(24) エイレナイオスは多くの研究者が指摘するように、キリスト教会最初の聖書神学者というべく、中でもパウロを尊敬

し、彼の影響を多大に受けた教父であったことは彼の著作の中からも明らかであろう。しかしまた、彼の言説の中には非聖書的な要素も少なからず混入していることがうかがわれる。彼の著作の中に散見する不統一性や不明瞭さはそのことと無関係ではないであろう。本稿ではほとんど考察の外において彼の霊(*Spiritus, spiritus*)や心(*anima*)についての見解を考察するのも、彼の思想、ことに彼の人間理解をより全体的に理解するためには必要であり、今後に期したいものと思っている。